

《研究論文》 大学アーカイブズの保存と活用についての一考察

― 専修大学所蔵相馬家文書の現状と課題 ―

瀬戸口 龍一
(大学史資料課)

はじめに

現在、多くの大学に資料センターや史料室、または大学史編纂課など名称は様々であるが、自らの大学の歴史に関する資料の収集・保存・活用を主な業務とする部署（以後、大学史資料保存機関と称す）が存在する。そこには創立者や教職員、卒業生に関する資料群が所蔵されていることが多い。例えば早稲田大学、慶応大学や同志社大学は創立者である大隈重信・福沢諭吉・新島襄に関わる資料群を所蔵しているし、明治大学では卒業生で総理大臣を務めた三木武夫に関するまとまった資料群を所蔵している。また京都大学や広島大学などの国公立大学は教員に関する資料を多く所蔵している。

では、こうした大学史資料保存機関では、資料群をどのように整理・保存し、どのような方法で公開・活用しているのか。大学史アーカイブズの整理・保存・活用方法については、平成一三年の「情報公開法」および平成二三年の「公文書管理法」の施行もあつ

て、特に国公立大学を中心に近年多くの議論がなされている。

とはいえ、まだまだどの大学も試行錯誤の状態であり、現状では各大学における事例報告を積み重ね、そのうえで各大学が所蔵する資料群に適合した整理・保存方法を探っていく必要があるだろう。もちろん公開や活用方法についても同様である。

本稿は、そうした問題意識から専修大学が所蔵する「相馬家文書」と呼ばれる資料群の現状を明らかにしたうえで、整理・保存・活用、そして公開のあり方を考察することを目的とする。これまで専修大学では相馬家文書を含め、所蔵する専修大学の歴史に関わる資料群を研究の一助とすべく、広く一般に公開することが議論されてきたが、残念ながら人的および経費的な理由から、公開の前提となる資料群の整理や目録化が進まず、またそれらをどのようにしていつ頃から公開していくのかというような具体的な議論もなされてこなかった。

しかし、平成二五年度より「相馬永胤文書の基礎的研究・私学創設者の多面的分析のためのアプローチ」(研究代表者…大谷正(専修大学文学部教授))を研究課題名とした科学研究費助成事業・基盤研究(C)の採択を得ることが出来、本格的に調査・研究・公開に向けて動き出すこととなった。提出した研究目的は次の通りである。

本研究は専修大学が所蔵する明治・大正期にかけて教育者・弁護士・銀行家として活躍した相馬永胤に関わる資料群の整理・調査・目録作成および明治九年から大正一三年という約五〇年にわたって書き綴られた日記の翻刻作業を行う。この基礎的作業および公開体制の確立、資料群の分析・研究を通して、①士族と旧藩の関わりの実態解明。②明治初期の海外留学生の実態解明。③私立法律学校の設立・経営実態。④横浜正金銀行の経営実態および明治政府の財政との関係性。⑤明治・大正期における地縁・血縁ネットワークの形成過程と実態解明が期待される。

しかし今回の研究計画は、人的・時間的な制約もあるため、上記五点の研究テーマの中で、彦根藩士としての側面(藩政史的)、海外留学生としての側面(教育史的)、銀行家としての側面(経済史的)の三つの側面にしばって研究を行う。本研究により近代日本の教育・経済・政治を考える一つの手がかりとし

たい。

この研究目的にあるように、まずは「相馬永胤に関わる資料群」(相馬家文書)を研究するための基礎的作業として整理・目録化したうえで、公開できる体制をつくることから始めたいと考えている。そのためには、まず相馬家文書の来歴を含めた概要、現在の保存状態、そしてこれまでの活用方法をまとめ、今後の課題について明らかにする必要がある。本稿では相馬家文書の基礎的研究を行うための前提とすべく、相馬家文書を題材として大学アーカイブズの保存・公開と活用について考察したい。

1. 大学史資料保存機関の変遷とその意義

大学史資料の最も大きな課題は、その存在が知られていないことにあった。というのもこれまで大学史に関わる資料が活用される場のほとんどが、五十年史、百年史といった年史編纂物であったからである。現在、大学図書館とOPAC (Online Public Access Catalog)と呼ばれる公共利用に供されるオンライン蔵書目録システムを導入していない館は皆無と言って良い。またホームページを持っていない館も皆無であろう。コレクションなどをホームページで紹介している大学図書館も多い。

しかし、大学史資料保存機関は図書館や博物館のように、閲覧・公開を建前としていないこと、またはそうした閲覧・公開に従事出

来る人員が足りないという理由などから、所蔵する資料を積極的にアピールしてこなかったし、また出来なかった。それは大学史資料保存機関の歴史とも深く関わっている。

大学に関わる資料を本格的に収集・活用を目的として設置された部署の古い例として、慶応義塾の塾史編纂所が挙げられる。昭和二六年のことである。百年史編纂を目的に「史実の調査。資料の整理および蒐集を始めた」という。早稲田大学も百年史編纂を目的に昭和三六年に校史資料係を設置、翌々年に校史資料室と改組している。さらに明治大学も大学史編纂を目的として昭和三七年に歴史編纂資料室を立ち上げている。このように当初は、大学史資料の保存ではなく、大学史編纂のための資料調査・収集を主たる目的として部署が設置されたことがわかる。

こうした流れは、昭和五〇～六〇年代にかけて創立百年を迎えることとなった明治初期に誕生した私立大学においてますます顕著になっていく。東京大学、法政大学、中央大学、同志社大学などがそうである。

ちなみに専修大学には、昭和四四年に九〇年史編纂のための資料の収集と整理を目的に「年史編纂室」が設置されたものの、刊行後はその役目を終えたとして解散。昭和四八年に改めて百年史編纂のために「年史編纂室」がつくられた。何度か名称変更を経て、現在は大学史資料課という名称になっているが、専修大学は百年史編纂以降、五年ごとに年史を編纂しているのも、その主な業務がその

時々の年史編纂であったことは間違いない。

さて、この時期の大学史資料の活用方法としては、当然のことながら年史編纂物の刊行であるが、収集した資料の目録や資料集や研究紀要の刊行も行われている。百年史のなかの資料編のような立派な装丁ではなく簡易製本ではあるが、法政大学では法政大学百年史編纂委員会資料部会編纂の「法政大学史資料集」を昭和五三年から、中央大学は中央大学百年史編纂委員会専門委員会編纂の「中央大学史資料集」を昭和五九年から刊行している。ともに、この時期を代表する大学史資料保存機関の仕事とさえいう。自校が所蔵する資料ではなく、国立公文書館や東京都公文書館の所蔵資料、また新聞記事などを取り上げたものが多いことがこの時期の資料集の特徴とも言える。まずは自校内部の調査よりも、他機関の調査を優先していたことがわかる。

ただし、この時期に設置された部署は、専修大学の年史編纂室のように刊行とともに解散した例も多く見られる。つまり年史編纂のために収集された資料（資料情報も含む）やそれを行った人々のスキルが蓄積・継続されなかったという点が大きな問題であった。恒常的に大学史資料を収集・保存・活用する部署の設置が声高に叫ばれたのも当然のことである。

こうした状況が大きく変わり出したのは平成一二年前後のことである。先に挙げた「情報公開法」の制定もその背景として挙げられる。それ以前にも慶応義塾が塾史資料室（塾史編纂所の後身）を昭

和五八年に福沢研究センターに改組発展させた例はあるが、歴史学または教育学の専門的知識を持った人材を教員や職員として配置し、恒常的に大学史資料を収集・保存・活用するための部署が誕生していく。

私立大学では、平成一〇年の早稲田大学大学史資料センター、平成一二年の立教学院史資料センター、平成一五年の明治大学史資料センターなどが代表例として挙げられる。国立大学では、平成一二年に全国で初めて本格的な大学文書館として設置された京都大学大学文書館を皮切りに大学文書館が次々とつくられていった。

これらの大学史資料保存機関は自校の歴史に関わる様々な資料の収集・整理・保存、そして閲覧を目的としており、これまでのように年史編纂のみを目的としていない点に大きな違いがある。そして専門的知識を要する人材を配したことで調査・研究が行われるようになった。この点も着目すべきであろう。

活用方法にも変化が見られるようになった。一つは閲覧の問題である。大学文書館では主要業務として閲覧を明記している。そのため所蔵資料の目録化・検索のシステム化が進められ、利用者への便宜が図られるようになった。もう一つは展示である。常設展示・企画展示を問わず、展示施設を併設した大学史資料保存機関が増えたことがその要因であるが、現在、展示は大学アーカイブズの主要な活用方法になったと言って良いだろう。

早稲田大学大学史資料センターを例に挙げると、その業務は「資

料の整理と公開」「資料の閲覧・複写サービス」「資料の収集」「企画展示・講演会等の開催」「出版・刊行」とある。そしてその組織を見ると、所長の下に、運営委員を置き、専任の助教と助手が業務を行うという体制になっている³⁾。

このように現在、大学史資料保存機関は大きく変わりつつある。そこには当然、大学側の思惑も反映されている。これまで周年事業の際にしかあまり顧みられることの無かった大学の歴史を積極的に発信するようになった背景としては、少子化および大学全人時代の到来という問題がある。大学、特に私立大学にとっては大学の歴史をアピールすることで外部の人々に自校の存在を広めたいという狙いがある。また近年、多くの大学で導入している自校史教育は、在学生および卒業生、教職員や保護者に自校の関係者であるというアイデンティティを持つてもらったためであることも多い。「スクールアイデンティティ」という言葉がよく使われているが、まさにそれである。

もちろん、そうした動きが少なからず問題を含んでいることは事実であるが、大学史活動⁴⁾に大きな変化を与えたことは間違いない、大学史資料の積極的な活用という流れは今後も進んでいくと考えて良いだろう。専修大学としてもこうした他大学の状況を踏まえ、相馬家文書の研究・公開という問題が持ち上がったことは言うまでもない。

2. 相馬家文書研究の背景

今回、相馬家文書を研究対象として取り上げようとした背景を述べておくと、多くの大学では、これまでもそれぞれの創立者に関係する資料を収集・保存・調査してきたが、前述したように近年の特徴として挙げられるのは、それらの資料を積極的に公開するようになってきたことである。従来のような年史編纂物、目録や資料集の刊行だけでなく、展示やホームページの開設など、その方法は様々であるが、その要因は大学そのものが研究・教育機関としてだけでなく、社会貢献を求められているという現状もある。つまり「知」の発信である。

さらに公開のもう一つの大きな理由として、各大学が所蔵する資料群が、日本近代史研究において重要な意味を持つということが認知されてきたことが挙げられる。例えば全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』（京都大学学術出版会 二〇〇五）では各大学における方法論や成果を詳しく見ることが出来るが、それも大学史資料保存機関に専門的知識を持った研究者が配属されるようになったことが大きな要因である。明治大学史資料センターのように、寄贈された資料群を整理・保存し、閲覧させるだけでなく、学内の研究者を集めて研究会を立ち上げたという例も見られるようになった。その成果として『大学史紀要 第一四号 三木武夫研究Ⅰ』（二〇一〇）や、『大学史紀要 第一六号 木村礎研究Ⅰ』がある。

大学史研究の潮流は、大学が持つ社会的意義などを考える高等教育機関としての「大学」研究と、大隈重信や福沢諭吉に代表される大学創立者研究の大きく二つに分けることが出来る。特に大隈や福沢、さらには新島襄といった高校日本史の教科書に登場するような人物は早くからクローズアップされ、研究も進められてきた。そして慶応義塾や早稲田大学もそうした研究の一助となるべく、創立者の書簡集などを刊行している⁵⁾。

大隈や福沢に限らず、私立大学の創立者の多くは教育者でありながら、官僚や財界人、政治家として活躍している。さらにそうした私立学校の創立者たちは各学校の行事や政府との種々の交渉などを通して繋がりを持っており、その意味では「教育者ネットワーク」を形成し、情報共有を行っていたとも考えられる。まさに近代社会を形成した人々の集まりであった。そして専修大学創立者の相馬永胤もその一人であった。

つまり従来の大学史研究に加えて、大学および大学関係者が、学内外で果たした仕事によって近代社会の形成・発展や学問の発達にどのように関与してきたのかという視点からの大学史研究が行われるようになったことで、資料群そのものも重要視されるようになってきたと言える。

このように考えるならば、専修大学が所蔵する相馬永胤に関係する資料群はまさに大きな研究上の価値を持つ資料群であると言うことが出来る。そのため、相馬家文書に関心を持つ学内の研究者に参

加してもらい、それぞれの分野からの研究を行うべく研究会を設置した。現在、文学部教授・大谷正（日本近現代史）、文学部教授・黒沢眞理子（アメリカ史）、経済学部教授・永江雅和（日本経済史）、大学史資料課・瀬戸口龍一（大学史）の四人で行っているが、研究が進み、新たな問題点などが出てきた際にはその都度、研究者に参加してもらえればと考えている。

3. 相馬家文書の来歴

それではまず、相馬家文書の来歴から述べていく。相馬家文書は、前述したように専修大学創立者である相馬永胤に関わる資料群であるが、もともと専修大学が所蔵していたわけではない。代々相馬家に保存されてきた。相馬家文書が今に残った大きな要因の一つである。

専修大学は明治一三年（一八八〇）に京橋区本挽町（現中央区）で誕生し、明治一五年には神田区中猿樂町、同一七年に現在の神田キャンパスがある神田区今川小路（ともに現千代田区）に移ってきた。明治一〇年代から二〇年代にかけて神田地区には専修大学のほか、法政大学・明治大学・中央大学・獨協大学・日本大学・共立女子大学などの前身となる私立学校があったが、実はこれらの学校には創立者に関わる資料はもちろん、明治・大正初期の学校資料はあまり残っていない。というのも明治二五年の神田大火に代表される度重なる火災被害、そして何より関東大震災による甚大な被害に

よって、学校が所蔵していた資料は灰燼に帰したためである。

専修大学も震災によって図書館の外壁の一部を残してすべての校舎が潰滅。当時の職員の手によって学生簿など重要な書類の一部が持ち出されたのみで、ほとんどが焼失したと言われている。つまり相馬家文書が早くから、例えば相馬永胤の生存中から専修大学が保管していたならば震災で焼失していた可能性が高かったのである。明治初期に誕生した大学創立者の資料群としての相馬家文書の稀少性はこの点からも指摘することが出来る。

話を相馬家文書の来歴に戻す。相馬の生涯は後述するが、相馬は明治四年にアメリカに留学し、帰国後の明治一二年に京橋区南紺屋町（現中央区）に居を構え、明治一四年には四谷区四谷仲町（現新宿区）に転居、明治三四年に豊多摩郡戸塚村（現新宿区）に別荘を構え、明治四三年に四谷よりこの別荘に移転する。このあたりは関東大震災のとき、比較的被害が少なかった場所であり、相馬の屋敷は僅かな破損ですんだと言う。相馬は大正一三年（一九二四）、震災の翌年、静岡県沼津の別荘で亡くなった。

この相馬永胤に関する資料群を専修大学に寄贈したのが相馬勝夫氏である。勝夫氏は永胤の孫に当たる。簡単に略歴を記しておく。

相馬勝夫氏⁷は永胤の孫に当たるが、少し複雑になるため八七頁の家系図を参照していただきたい。勝夫氏の父に当たる石川又二郎は、当初、永胤の次女・宜と結婚。勝夫氏自身も三歳まで石川姓を名乗っていた。永胤には男子が二人いたが、早世したため、明治三

九年、又二郎を養嗣子とする。その際に勝夫氏も相馬家へ入籍することになったのである。以後、勝夫氏は相馬姓を名乗った。

勝夫氏の母・宜は明治四三年に逝去するも、又二郎は明治四五年、永胤の三女・鈴子と再婚。大正一〇年には又二郎、さらに同一三年には永胤が死去。永胤の遺言によって勝夫氏が相馬家の家督を相続することとなった。このときに永胤に関する資料も勝夫氏が相続したと考えて良いだろう。

勝夫氏が専修大学に関わるようになったのは昭和五年（一九三〇）、東京商科大学（現一橋大学）を卒業後、講師として「商業英語」と「商業概論」を担当するようになってからである。昭和一三年には教授（専門は「保険学」）に就任。戦争による疎開を経て昭和二六年には専修大学に復帰する。そして昭和三〇年から商経学部長、同三六年に学長および短期大学部長に就任し、昭和五一年までの長きに渡って創立者・永胤の意志を引き継ぎ学長として専修大学を主導した。さらに昭和五一年から五八年までは総長も務めている。

昭和四九年に専修大学創立百年記念事業の一環として専修大学百年史刊行運営委員会が発足する。その委員長が相馬勝夫氏であった。『専修大学百年史』の「あとがき」に次のような文章がある。

当初は昭和五十三年末刊行の予定で作業が進められたが、各委員のご努力にもかかわらず、本学としては百年史編纂は初め

ての事業であるため、資料収集ならびに執筆には予想以上の困難をきわめた。

しかし相馬家に長く大切に保存されていた古文書（創立者相馬永胤が明治九年米国留学中から大正十三年死去するまで書き綴った日記ならびに懷旧記、日本法律会社憲法等）の寄贈によって大いにたすけられた。

とあるように相馬家文書は百年史編纂を機に専修大学に寄贈されたことがわかる。ただし、年史編纂室（昭和四八年から五六年までの呼称）にいた職員の話によると、相馬家文書はまとまって寄贈されたわけではなく、勝夫氏が少しずつ、「こんなものもあるよ」という感じで、折に触れて資料を持ってきたということであった。また百年史編纂中のことであり、寄贈なのか、預かったのかが不明であったため、きちんとした受入記録は取っていないとのことである。そのため、個々の資料がいつ専修大学に入ったかは不明である。

大学史資料課に「相馬永胤関係文書」と題された資料目録が残っている。作成年代は不明であるが、おそらく百年史編纂の際に作成されたものであろう。資料の所蔵先は三つある。「東京・相馬勝夫所蔵」「専修大学年史編纂室所蔵」「専修大学図書館所蔵」である。

その多くは「相馬家所蔵」となっていることから、当時の職員の言葉通り、当初、編纂のために勝夫氏が家から資料を持ってきた資料

については預かったという意識が高かったのだろう。これが最初に専修大学に入った相馬家文書の第一段となった。これを相馬家文書Aと呼ぶことにする。

実は専修大学には相馬家に関わる資料群はもう二つある。一つは大学史資料課書庫の棚に風呂敷に包んであった近世期の資料群である。これについてはなぜ別にしてあったのか、いつ専修大学に入ったのが不明である。これを相馬家文書Bと呼ぶこととする。そして最後が、近年、勝夫氏のご子息・光之氏から寄贈いただいた資料群である。これを相馬家文書Cとするが、この三つを合わせて今後、専修大学では相馬家文書と称することとしたい。

4. 相馬家文書の概要とその資料的価値

次に相馬家文書が日本近世・近代史研究上、どのような意味を持っているかを相馬永胤の生涯と資料群の内容に触れながら概説する。

明治一〇年代から二〇年代にかけて近代的な国家づくりのための法整備や法曹育成といった声にこたえるべく、次々と私立法律学校が開校する。法政大学・明治大学・早稲田大学・中央大学・日本大学などである。専修大学もその一つであるが、その特徴は法律科だけでなく、経済科を併設したことにあった。この特徴は創立者が修めてきた学問と大きな繋がりがある。そして後述するが、その特徴は「相馬家文書」にも通ずる。

専修大学は現在、創立者を相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の四人としているが、なかでも相馬永胤は学校経営および教育において中心的な役割を果たし、初代校長・初代学長も務めるほど専修大学とは深い関わりを持っている。また前述したように永胤の令孫である相馬勝夫氏は相馬家文書Aの寄贈者であり、専修大学総長も務めている。相馬家そのものが専修大学の歴史を考える際に重要な家であると言える。相馬家文書が専修大学にとって重要な資料群とされてきた訳はそこにある。

相馬永胤について簡単に触れておくと、嘉永三年（一八五〇）、彦根藩士・相馬右平次の長男として誕生。戊辰戦争の際には新政府側についた彦根藩兵の一員として北関東と東北地方で参戦している。その後、江戸時代後期から明治初期を代表する儒学者であり、谷干城や陸奥宗光など多くの逸材を門下生として輩出した安井息軒や、後に東京大学において国史科を創設した重野安繹に学んだほか、藩の命を受け薩摩藩で兵学修行も行っている。この薩摩留学中にまたもや藩から洋行の命を受け、明治四年（一八七一）にアメリカに渡った。当初は陸軍大学を志望するも外国人の入学を拒否され、専攻を法律学や経済学に変更し、ニューヨーク州の私立学校・ピークスキル学院（商業課程）を経て、コロンビア大学で法律を、イエール大学大学院で法律と経済を学び、最終的には法学士の学位を得て帰国した。

専修大学の創立者たち四人が出会ったのはアメリカ留学中のこと

で、日本人留学生たちが集まって結成された研究会「日本法律会社」において法律学校や法律図書館設立などの構想が練られた。これが後の学校設立に繋がっていく。

帰国後は、明治一三年に専修大学の前身となる専修学校を仲間たちとともに開校。生涯、学校教育と学校経営に力を注ぐ一方で、司法省附属代言人や横浜裁判所判事などを経て、法律家から銀行家へと転身する。横浜正金銀行には当初、官選取締役として入行。途中、衆議院議員に当選するも議員を体調不良のため辞職し、正金銀行に戻った。銀行家としては正金銀行頭取にまで上り詰め、正金銀行海外支店の開設や松方財政の一環である金本位制の確立にも関与している。創立した学校同様に自らが学んだ法律と経済学を実践した人物と言える。

こうした経歴のため相馬家文書にはいくつかの特徴を見ることが出来る。①彦根藩士としての相馬家の史料を含むこと。②アメリカ留学時代の史料を含んでいること。③弁護士活動がわかる史料を含んでいること。④横浜正金銀行役員および頭取としての史料を含んでいること、などである。つまり法制史・経済史・教育史など多面的な視点から資料を研究出来るということである。そして、資料の形態は書簡・日記・原稿・愛用品・蔵書・写真など多岐にわたっている。

①は相馬家文書Bがその中心となるが、彦根藩士時代の相馬家に関する史料群が残っている。その多くは永胤の祖父・隼人と父・右

平次に関する史料が主で辞令や褒状など二人の役務を知ることが出来る。隼人と右平次は御城使役（留守居）という、彦根藩と幕閣や旗本・諸大名家との間を取り持つ重要な役目を与えられていた。特に隼人は万延元年（一八六〇）、藩主・井伊直弼が惨殺された桜田門外の変において事後処理に奔走した人物でもあった。また相馬家文書Aには後述するが近代における旧彦根藩士たちの繋がりを知ることの出来る史料が含まれている。このように相馬家文書の研究は彦根藩の幕末史、さらに明治期における士族と旧藩の関係性などを解明する手がかりとなるだろう。

②からは明治初期の日本人海外留学生の様子を同時代史料で見ることが出来る。明治初期、数多くの日本人がアメリカやヨーロッパに留学した。私立法律学校の創立者にもそういった人物は多い。政法大学や明治大学の創立者はフランスに、中央大学の創立者はイギリスに、日本大学の創立者はドイツに留学し、法学を学び、帰国後、学校を設立した。しかし留学時の史料はほとんど残っていない。しかし相馬家文書Aには卒業証書やコンベンシア大学在学時の判例研究ノート、先に挙げたニューヨーク近郊に暮らす日本人法学生たちが設立した法律学研究会「日本法律会社」に関する規約や記録、宿帳に書簡などが残っている。教育史において類を見ない貴重な資料群と言える。

また③について述べると、相馬は、当時国内に三人（星亨・目賀田種太郎）しかいなかった司法省附属代言人を務めた人物である。

司法省附属代言人とは、司法省が任命した民間の代言人（弁護士）のことで、官庁関係の訴訟を担当したと言われているが、その実態はよくわかっていない。明治一三年に、代言人規則が大幅に改正され、試験の合格者のみが代言人を名乗ることが出来るようになったことや、翌一四年にはその制度が廃止されたこともあり、相馬家文書Aは司法省附属代言人を含め明治初期の弁護士士の活動内容を知ることが出来る唯一とも言える資料群である。特に相馬が書き残した日記がその役目を果たすことだろう。

④は、近代日本において政治的・経済的に大きな役割を果たした横浜正金銀行の明治から大正初期の実態を知るうえで大いに役立つ資料群である。明治一二年に貿易金融や外国為替の取引を専門として誕生した横浜正金銀行（営業開始は明治一三年）に関する資料群としては、その本店の建物を使用している神奈川県立歴史博物館には「旧横浜正金銀行コレクション」が、東京大学経済学図書館・経済学部資料室（横浜正金銀行資料）、同じく東京大学東洋文化研究所図書館には横浜正金銀行時代の資料を引き継いだ旧東京銀行調査部旧蔵書が残っている。しかし横浜正金銀行の関係者の個人史料としては、管見の限りまとまった史料を見ることが出来るのは相馬家文書Aしかない。正金銀行員としての海外調査記録、辞令、時の大蔵大臣・松方正義との書簡などが相馬家文書Aには収録されている。

このように相馬家文書は日本近世・近代史研究において重要な資

料群であることは間違いないが、後述するように、これまで専修大学の記念誌や専修大学関係者の伝記のみに利用され、それ以外の研究にはあまり活用出来ていないのが現状である。その理由としては全件目録が作成されていないこと、公開するための電子化作業が進んでいないことが挙げられる。特に相馬家文書BおよびCについては手つかずのままである。

5. 相馬永胤日記の現状と重要性

相馬家文書Aの中核をなすと言っても良いのが相馬永胤日記（以後、「日記」と略）である。基盤研究「相馬永胤文書の基礎的研究・私学創設者の多面的分析のためのアプローチ」では、基礎的作業の一つとして、この「日記」の翻刻・公開を行うことを明記した。

「日記」は明治九年（一八七六）年一月一日から始まり、永胤が亡くなる間際の大正一三年（一九二四）一月一七日に終わっている。その期間は実に四八年におよぶ。明治一八年八月から明治二一年までの約二年半分のほか、何年かの抜けがあるが、ほぼ毎日記述されているという大部なものである。その詳細は文末の表にある通りである。

古記録の一つである日記が同時代史料として歴史学研究的うえで重要な意味を持っていることは言うまでもない。その意味では「日記」の翻刻・公開は多くの研究者にとって意味のあるものである

う。「日記」が英文と和文で書かれている点も特徴の一つである。つまり当時の日本人の英語力を知ること、出来、歴史学のみならず英語学研究にも一役買うことが出来るだろう。

ただしその量が膨大であることもあり、基盤研究においては、海外留学生に関する研究および横浜正金銀行研究に重点を置く意味から、まず留学時期（明治九年～十二年）の英文日記および明治二七～二九年の全文翻刻を行う予定であるが、最終的には全期間の「日記」の翻刻・公開をめざすこととする。

なぜ明治二七年から二九年の「日記」を翻刻するのかという理由について少し触れておく。この時期、相馬永胤は横浜正金銀行取締役として海外支店開設のための調査旅行に出掛けており、本人も生涯「最良の日」であったと後年述べている。当該期の日記を詳細に見ていくことで、正金銀行がどのような理由で、またどのようにして海外支店を開設していくかを知ることが出来るのではないかと考えたからである。後述する相馬永胤の「巡回記」と比較する意味もある。

では、現在、「日記」はどのようなになっているのかを述べる。現在、「日記」については、科研の今年度のスケジュール通り、デジタルカメラによる全頁の写真撮影が終了、閲覧しやすいように画像処理を施した。また昭和五七年一〇月にマイクロフィルムでの撮影が行われており、その紙焼きも製本してあるため、閲覧は可能であるが、こちらはモノクロ画像となっている。

しかし問題点がないわけではない。相馬家文書には鉛筆書きの史料が多く含まれている。「日記」のなかにも市販の手帳に鉛筆書きで日々を記しているものがあり、経年劣化のために今では薄くなつて文字がほとんど判読出来ないものもある。こうした史料については、今後、赤外線撮影などを含めて復元していく必要性があるだろう。

また革製表紙を用いたものもいくつかあり、これらもかなり劣化している。ただし修復のために多額の費用がかかるため、これらをどのようにすべきかは今後の課題としたい。出来るだけ保存を考え、原資料の閲覧は避け、展示のための複製を作成するなどの対応を考えたい。

6. 相馬家文書の整理・修復保存作業について

現在、相馬家文書は前述したように三つに分類されている。繰り返しになるが、一つは百年史編纂過程において相馬勝夫氏から寄贈された日記類を含む相馬永胤に関わる資料群（相馬家文書A）、二つ目は、大学史資料課書庫に風呂敷で包んだ状態で保管されていた相馬家に関わる近世文書（相馬家文書B）、そして三つ目は、相馬勝夫氏のご子息より寄贈された相馬勝夫氏に関わる資料群（相馬家文書C）である。相馬家文書Cのほとんどは勝夫氏が所蔵していた専修大学に関わる書籍類（年史、専修大学出版局で出版した自著など）で若干、書簡、写真アルバムなども含まれている。また「相馬

永胤伝』の稿本もある。

これらの保存・整理現況について述べる。相馬家文書Aは現在、紙資料についてはすべて一点づつ中性紙封筒もしくは桐箱に収められ、モノ資料についてもその資料の大きさに合わせて作成した桐箱に入れ、温度・湿度が管理された大学史資料課書庫のキャビネットおよび棚に収められている。

それまで通常の茶封筒に入れられ、耐火金庫に収蔵された相馬家文書Aが、現在のような保存・整理状況になったのは平成一八年のことである。洋紙を使った日記などの酸性化が進んでいたこと、鉛筆やペンが薄くなつて読めなくなったものが出てきたこと、さらに紙資料以外のモノ資料についてもカビなどの汚れが目立つようになってきたことをその理由として、専修大学創立者である相馬永胤関係資料を後世に残していくため、つまり保存のための修復作業を行ったのである。

業者に依頼した作業内容としては、①クリーニング処理（中性紙ケース、テープ・養生処理含む）、②とし金具はずし（はずし後処理含む）、③脱酸性化処理、④革表紙保存処理、⑤修復処理、⑥締め直し、⑦修理製本、⑧桐箱作成、である。四八二点の資料に対してこれらの作業が適宜行われた。

この修復作業は、相馬家文書Aの保存のためになっただけでなく、相馬家文書Aにはどのような資料があるのかをリスト化したという副次的な効果ももたらした。この作業を行うために各資料を表

題を付け、サイズを測り、どのような材質（紙ならば和紙・洋紙などの選別）なのか、そして資料がどのような状態（どこがどの程度傷んでいるのかを調査）にあるのかの詳細な調査が行われたのである。その際、照合のためのデジタルカメラによる簡単な資料撮影（表紙のみ）も行われている。これにより現在、相馬家文書Aについては資料の大まかな概要を把握することが出来ている。

相馬家文書Bは、現在、風呂敷に入っていた資料を一点づつ仕分けしたうえで、中性紙封筒に袋詰めを行い、中性紙の保存箱に入れているが目録化はまだである。そして相馬家文書Cについては、脱酸性化を行ったうえで、中性紙の保存箱（四箱）に入れたが、仕分け作業および目録化は行っていない。これらは相馬家文書Aと同様に温度・湿度が管理された大学史資料課書庫のキャビネットおよび棚に収められている。

今後の整理方法としては、まず相馬家文書としてすべての資料を一括する必要がある。前述したように専修大学が所蔵する相馬家文書は相馬勝夫氏およびその後は勝夫氏のご子孫から大学に直接、または宅急便などで送られてきたものである。そのため従来の文書整理の際に使用するような保存の原型を尊重し、現状を復元するための番号を付す必要性はない。もとの保存方法が不明だからである。

また唯一リスト化されている相馬家文書Aも修復の際に、業者が分類（例えば日記なら日記、写真なら写真というように）しているためにどのような順番で相馬勝夫氏から寄贈いただいたのかを復元

することもはや不可能である。この番号を継続して使用する意味もあまりない。現状復元のための番号（ここでは「整理番号」と呼ぶ）を考慮しないならば、資料の年代順、または分類別に並び替えた後に適宜、番号（「分類番号」と呼ぶ）を振っていく方法が利用者にとっては最も見やすい目録ということになるだろう。

そこで相馬家文書については、まず三つに分かれている資料群をひとまとめにし、袋詰めした順番に整理番号を付すこととする。次にすべての資料の表題・年代などを目録化したうえで、分類を施し、年代の古い順番に並べ替え、整理番号とは別に分類番号を付していくことにしたい。利用者向けの目録は分類番号を付した方を提供する。利用者の便宜を図るためである。

ただし、今後新たに相馬家から資料が寄贈された場合には、受入順に整理番号を付けることとし、そのうえでそれまでの資料と同様に分類作業を施すことにしたい。

公開方法については議論を必要とするが、他大学の例にならって目録を刊行するとともに、ホームページ上でその目録から資料を検索出来るようなシステムを構築することが望ましいだろう。しかし現在、専修大学大学史資料課では独自のホームページを開設していない。この点も今後の大きな課題である。

7. 相馬家文書のこれまでの活用事例

前述したように、専修大学として相馬家文書の存在を積極的にア

ピールしてこなかったこともあり、それほどその存在を知られていないわけではないが、まったく活用してこなかった訳ではない。ではどのように活用されてきたのか。

昭和三四年に発行された『専修大学八十年小史』には「相馬日記」「日本法律会社憲法」、さらには創立者たちによる法律用語の翻訳辞典である「法詞訳集」の写真が掲載されている。管見の限り、これが初めて「相馬家文書」が大学史に活用された例と思われるが、その後の年史編纂では必ず使用されるようになる。その意味でも相馬家文書Aの活用の第一は年史編纂ということになるだろう。

そのほかにも『相馬永胤伝』『回想相馬勝夫』などの相馬家の伝記にも使われている。専修大学のなかではその存在は認知されていたことがわかる。

では外部からの活用はどうだったのか。平成一六年、神奈川県立歴史博物館が特別展「重要文化財旧横浜正金銀行本店本館創建100周年記念 横浜正金銀行・世界三大為替銀行への道」を開催している。このとき、二四点の資料を専修大学が貸し出しているが、すべて相馬家文書Aである。

相馬永胤は、明治三〇年（一八九七）から三九年にかけて横浜正金銀行の第六代頭取を務めたほか、明治一五年から大正一三年（一九二四）、その間二六ヶ月ほどの空きはあるが、約四一年間もの間、取締役も務めている。また相馬は横浜正金銀行本店建物の設計者である妻木頼黄とも旧知の間柄であり、展示ではかなり相馬を大

きく取り上げている。

相馬が頭取を務めていた時期は松方財政の一環である金本位制が実施され、欧米との為替取引高も順調に伸びるなど、正金銀行にとっても順風満帆な時期であった。相馬家文書Aに収められている「日記」、海外支局開設のための欧米調査旅行の記録や辞令、慰労金目録、書簡などが展示された。

相馬家文書Aにおける横浜正金銀行時代の史料はそのほかにも前述した『専修大学史紀要』の第四号および第五号に、相馬が横浜正金銀行海外出張所の検査などのために明治二十七年四月一三日から翌年一月二七日にかけてアメリカ・ヨーロッパ・インド・香港を巡回した際の日記「巡回記」を翻刻したものが掲載されている。この翻刻は専修大学大学院文学研究科に在籍している院生が中心になって行ったもので、相馬家文書が大学院の研究教材として活用されたという点に大きな意味を持つ。

そのほかにも相馬家と彦根藩という視点からの活用がある。平成二一年に彦根城博物館が開催した特別企画展「政治の時代・井伊直弼と幕末の群像」において、直弼没後の相馬ら旧彦根藩士による顕彰活動に関する事例を取り上げている。それが明治四二年、横浜開港五〇周年を記念して戸部山（現在は掃部山）に建設された井伊直弼の銅像である。このとき、この銅像の除幕式において相馬は建設委員総代として経過報告を行っているが、この件に関する史料が相馬家文書Aには残っており、それをこの企画展では展示してい

る。

同事例の紹介は、『新修彦根市史 第三巻 通史編 近代』（二〇〇九）および『新修彦根市史 第八巻 史料編 近代二』（二〇〇三）でもなされており、その史料の一つとして相馬家文書が使用されている。彦根城博物館や彦根市史編さん室においては相馬家文書Aの存在が認知されていることを物語っている。『新修彦根市史 第八巻 史料編 近代二』の史料解題では「専修大学総務部大学史資料課所蔵文書」と呼んでいる。

同市史には、もう一つ別の事例で相馬家文書が使用されている。

それが明治二十一年、旧幕臣で、当時、ジャーナリストとして活躍していた島田三郎が書いた『開国始末・井伊掃部頭直弼伝』をめぐる旧彦根藩士たちの対応問題である。『開国始末』は井伊家が所蔵する史料を使って直弼の大老時代を描いた伝記として、研究史的にも非常に評価の高い作品である。島田は、『開国始末』の刊行に先立って、旧彦根藩や旧幕府関係者に稿本を送り、批評を求めているが、そのなかの一人が相馬永胤であった。その際、相馬は井伊直弼の評価は『開国始末』を上梓せずとも時が来ればその罪は晴れるだろうと考えていたことが、相馬家文書Aに残る書簡から知ることが出来る。それをこの本では紹介しているのである。

このように相馬家文書Aは日本近代社会において旧藩士と藩との関係を知るうえで重要な資料群であることを展示や市史での活用から知ることが出来る。

彦根藩士としての相馬家の研究は残念ながらそれほどないが、青木美智男「創立者・相馬永胤家と祖父隼人について」（『専修大学史紀要 第二号』二〇一〇）がある。これは桜田門外の変に関わった永胤の祖父・隼人から永胤までを彦根藩の史料「侍中由緒書」（彦根城博物館所蔵）からその動向を探り、相馬家がどのような家柄であったのか、また彦根藩士としてどのように位置づけ出来るのかを考察した論文である。今後、こうした史料をもとにした実証的な研究を積み重ねていくことで、彦根藩における相馬家の意義、そして日本近代史における士族の社会的役割を考えていく必要があるだろう。

以上、これまで述べてきたように、相馬家文書は専修大学史、横浜正金銀行史、そして近代における旧彦根藩士の動向を考える彦根地域史においては注目・活用されてきた。しかしそれらはまだ史料の紹介が中心で、研究史のなかに位置づけられてはいない。それは相馬家文書の全体像が知られていないからである。つまり位置づけようにも資料の性格がわからないため位置づけられないという事情がある。それは所蔵する専修大学が全資料目録を作成・公開していないことに大きな原因がある。だからこそ公開するための体制を早急に確立しなければならない。

おわりに

これまで何度も述べてきたように、現時点での相馬家文書の最大

の課題は目録を公開していないことにある。どんなに歴史的に価値のある資料群であったとしても、その全体像を広く社会に向けて発信していかない限り、限定的な活用がされるだけの「宝の持ち腐れ」となってしまう。ただし目録を公開するということは、閲覧に応じるということにはかならない。しかし保存と公開が相反する概念であることはこれまで言われてきた通りである。

まずは保存のための脱酸性化や修復などの処置を施し、資料を一点づつ中性紙封筒に入れ、中性紙の保存箱に収めたうえで、状態の良い場所で管理する。そして資料目録を作成して資料群の概要を明らかにする。またマイクロフィルムやデジタルカメラなどで撮影し、原史料を見せることなく、手軽に資料が閲覧出来るようにする。現時点ではこれが保存と公開を考えるうえで最適な方法と言えるだろう。当たり前のことであるが、相馬家文書もそのようにすべきであることは言うまでもない。

ただし資料を所蔵する資料保存機関によってそれぞれの事情がある。本報告では相馬家文書をめぐる専修大学のこれまでの対応、今後の課題や展望を述べたが、そのうえで費用や人員といった問題を考慮しなければならない。保存と公開の問題を考えるうえで最も重要なことは費用と人員をどのように確保するのかに尽きると言っても過言ではない。その点、相馬家文書の今後の公開・活用などのあり方については科研費の採択を受けたことによって大きく変わっていくことになるだろう。

費用と人員を確保するために必要なことは何か。結局、その資料群が費用と人員をかけるほどの価値があるということをアピールするしかない。金銭的価値だけを問題にするのではなくその資料群が持つ歴史的意義を明らかにするためには、専門的知識を持つ人材が必要である。現在、大学史資料保存機関に所属する人間がその資料群の持つそれぞれの特性を知り、それを積極的に発信していかなければならない。そうして多くの人々に活用してもらうことでまたその資料群の歴史的価値が高まっていく。保存が大切であることは言うまでもないが、公開も同じように大切であるのはそういった意味を持つからである。

科研費申請書類では、「本研究の学術的な特色・独創的な点および予想される結果と意義」として次のように述べた。相馬家文書の研究が何をもたらすのか。それを掲げて本稿を終えたい。

本研究は前述の通り、以下の点を今後、深めていくための基礎的研究である。

①士族と旧藩の関わりの実態解明／②明治初期の海外留学生の実態解明／③私立法律学校の設立・経営実態／④横浜正金銀行の経営実態および明治政府との関係性／⑤明治・大正期における地縁・血縁ネットワークの形成過程と実態解明。

一つの資料群を用いて複数の研究者が学際的かつ多面的な研究を行うという手法自体は珍しいものではない。しかし本研究

で用いる「相馬永胤家文書」のような資料群の分析を行う際には最も有効な手段であることも間違いない。「2 相馬家文書の概要とその資料的価値」で述べたようにあくまでも本研究は上記の五点の問題を深めていくための基礎的研究ではあるが、「相馬永胤家文書」は幕末・明治・大正を生きた一個人の資料として、非常に重要な資料群と思われる。特におよそ五〇年にもおよぶという他に見ない「相馬永胤日記」の翻刻・公開は、個人史という枠を大きく飛び越え、教育史・経済史・政治史・法制史・文化史などのあらゆる近現代史研究の一次史料として非常に大きな役割を果たすと確信している。

※本論文は平成二五年度の科学研究費助成事業・基盤研究(C)「相馬永胤文書の基礎的研究私学創設者の多面的分析のためのアプローチ」(研究代表者・大谷正(専修大学文学部教授))によるものである。

(註)

- 1 時子山常三郎「大学史編纂研究の新発足に当って」(『早稲田大学史記要 第一巻第一号』一九六五)
- 2 二〇一四年二月現在で『法政大学史資料集』は第三四集まで、『中央大学史資料集』は第二五集まで刊行されている。
- 3 早稲田大学大学史資料センターの業務内容および組織について

は、ホームページ (<http://www.waseda.jp/archives/>) に拠った。

4 大学史活動という概念については、鈴木秀幸『大学史および大学史活動の研究』（日本経済評論社 二〇一〇）によると、大学史に関わる編纂事業はもちろん、「資料の調査・収集、整理・保存、利用・応用など」の様々な活動を指す。

5 慶応義塾は平成一三年から岩波書店より『福沢諭吉書簡集』（全九巻）を刊行。早稲田大学史資料センターはみずす書房から『大隈重信関係文書』と題して大隈宛ての書簡約六〇〇〇通を平成一六年より毎年、翻刻・編纂し、刊行している。

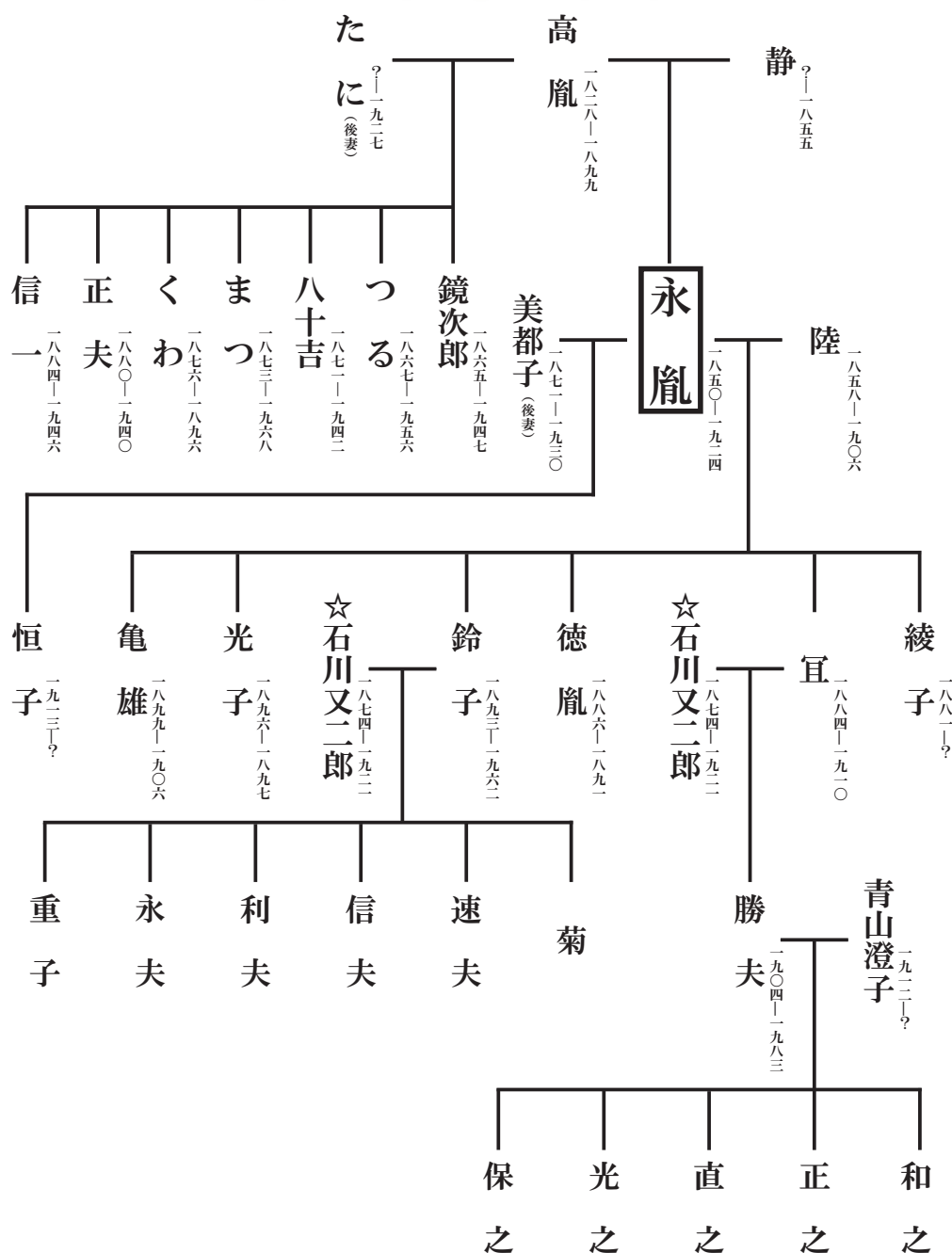
6 専修大学相馬永胤伝刊行会編『相馬永胤伝』（専修大学出版局 一九八二）

7 相馬勝夫氏の生涯については、専修大学相馬勝夫先生追想録編集委員会編『回想相馬勝夫』（専修大学出版局 一九八四）に拠った。

8 専修大学編『専修大学百年史 下巻』（専修大学出版局 一九八一）

9 整理作業については、神谷智「大学史資料の「整理番号」について」名古屋大学史資料室における事例紹介・」（『名古屋大学史紀要 第五号』一九九七）を主に参考にしたが、そのほかにも大藤修・安藤正人著『史料保存と文書館学』（吉川弘文館 一九八六）、国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』（岩波書店 一九八八）に詳しい。

相馬家系図



※ 1. 『相馬永胤伝』、『回想相馬勝夫』をもとに作成したが、没年の一部はご遺族の方々から伺った話をもとにした。

※ 2. ☆印の石川又二郎は同一人物であり、明治 39 年 (1906) に相馬家の養嗣子となった。

タイトル	記載日	未記入日	言語	備考	相馬年表
The CENTENNIAL DIARY 1876	1876 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	無し	英文	住所録・会計簿あり	コロンビア大学在学
EXCELSIOR DIARY 1877	1877 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	4 月 4・5・9・22~26 日、5 月 7 日、 7 月 4・5・18・27・29 日、8 月 2・3・ 7~10・12・13・20~23 日、9 月 20・ 24~26・29 日、10 月 5・6・9・12・13・ 19・20・23・30・31 日、11 月 2・5・7・8・ 10・16・20・22・25・26・28 日、12 月 2~4・6・10・11・15・21 日	英文	住所録・会計簿あり	5 月コロンビア大学卒業、9 月 イエール大学入学
THE STANDARD DIARY 1878	1878 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	7 月 19・20・26 日、8 月 3・11・20・ 21・27~29 日、9 月 1 日、10 月 24 日、 11 月 3~5・22 日、12 月 5・6・13・ 14・21~24	英文	住所録・会計簿あり	法律事務所で修習
THE STANDARD DIARY 1879	1879 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	2 月 20・21・24・27・28 日、3 月 1・ 20・21 日、4 月 2・3 日、5 月 2・3 日、6 月 21・22・29・30 日、7 月 1 ~3 日、8 月 8~19・24~31 日、9 月 1~13・15・16 日、10 月 11・13・ 16・24~28・31 日、11 月 5・18 日、 12 月 1・24~26 日	英文	住所録・会計簿あり	9 月アメリカより 帰国、11 月目賀 田と共同法律事 務所設立、12 月 慶応義塾に夜間 法律科設置
(手帳)	1880 年 1 月 1 日 ~6 月 30 日	1 月 23 日、2 月 8・9・11・13 日、3 月 18・19 日、4 月 15 日、5 月 4・ 13・21・27 日、6 月 6・7・15~19 日	英文	住所録・会計簿あり	1 月元老院雇・三 漢塾で講義担当、 6 月司法省附属 代言人
(日記メモ)	1880 年 11 月 26 日 ~27 日		和文		
(手帳)	1880 年 7 月 1 日 ~12 月 31 日、 1881 年 1 月 1 日 ~10 月 24 日	7 月 1~6・22・23 日、10 月 6・13~ 17・22 日、11 月 1 日、12 月 27~ 29 日、3 月 27 日、5 月 21 日、6 月 8~10・17・22・29・30 日、7 月 5~15 日	英文 和文	会計簿あり	9 月専修学校開 校、11 月東京代 言人組合副会長 ／3 月横浜裁判 所詰判事、10 月 東京始審裁判所 詰
当用日記簿 明治十五年壬午年	1882 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	2 月 22・23 日、4 月 11・12・24~30 日、5 月 ~10 月、11 月 1・2 日、 12 月 30・31 日	和文	会計簿あり	10 月横浜正金銀 行取締役
明治十五年壬午 懐中日記	1883 年 1 月 1 日 ~4 月 30 日	2 月 12~14 日、3 月 20~31 日、 4 月 4~30 日	和文	会計簿あり	
(日記メモ)	1883 年 7 月 12 日 ~8 月 23 日	7 月 14~16・20・23~28 日、8 月 3・ 9~21 日	和文	銀行関係覚書あり	
(日記メモ)	1883 年 8 月 16 ~18・21・22・27 日、 9 月 1・3・7 日、10 月 11・16・20 日、 11 月 1・2・8・27 日		和文	銀行関係覚書あり	
(手帳)	1883 年 9 月 4 日 ~22 日	9 月 18 日	和文	長野県上田 出張日記	
明治十七年甲申閏年 懐中日記	1884 年 1 月 1 日 ~8 月 31 日	3 月 5~8 日、4 月 28~30 日、5 月 20・21 日、6 月 4 日、7 月 7 日、 8 月 7・8・11・12・17~22・25~31 日	和文	会計簿あり	

タイトル	記載日	未記入日	言語	備考	相馬年表
(手帳)	1884年9月14日 ~12月31日	11月22日	英文	取締役決議 ほか銀行関 係覚書あり	9月欧米へ出張
(日記メモ)	1884年8月13日 ~20日		和文	鎌倉・箱根 旅行記	
(手帳)	1885年4月5日 ~7月28日	5月20日	英文	6月分会計 簿あり	7月ロンドンより 帰国
明治廿一年戊子閏年 懷中日記	1888年1月1日 ~12月31日	2月17・26日、3月25~31日、 4月1・2日、5月28日、6月5~ 9・19・21~23日、7月5~7・23日、 8月1・5~10・28~31日、9月8・ 13・14日、10月11・20~26・31日、 11月1・7~9・14~16日、12月7・ 17~19・28・29日	和文	会計簿あり	1月横浜正金銀 行取締役退任、4 月横浜正金銀行 内外法律相談役、 8月専修学校初 代校長
明治二十三年 当用日記	1890年1月1日 ~4月30日	1月7~31日、2月、3月28~31日、 4月1・2・21~30日	和文	会計簿あり (1~12月)	3月横浜正金銀 行取締役、7月 衆議院議員
明治二十四年 当用日記	1891年1月1日 ~4月30日	2月2~7・24・25日、3月17~19日、 4月1~11・15~30日	和文	会計簿あり (1~12月)	2月衆議院議員 辞任
(手帳)	1891年5月19日 ~6月11日		英文	会計簿ほか あり、上海 出張記	
(日記メモ)	1892年11月17日 ~12月9日、21~27 日		和文 英文	関西出張記 ほか	
(手帳)	1893年1月1日 ~5月24日	2月6・17~28日、3月、4月1~4 日	和文	「本店へノ 用事」ほか メモ書きあり	
(手帳)	1894年5月5日 ~6月30日		和文	欧米旅行記	
(手帳)	1894年7月1日 ~10月31日	10月12日	和文	欧米旅行記	
(手帳)	1894年11月1日 ~12月31日、 1895年1月1日 ~27日、2月5日、 5月2日		和文	欧州旅行記	
巡回記 其一	1894年4月13日 ~5月31日		和文	欧米旅行記	
巡回記 其二	1894年6月1日 ~8月8日		和文	欧米旅行記	
巡回記 其三	1894年8月9日 ~10月12日		和文	欧米旅行記	
巡回記 其四	1894年10月13日 ~1895年1月27 日		和文	欧米旅行記	
(手帳)	1896年5月1日 ~12月26日	7月3~7・14・28~29日、11月 12~14日	和文	住所録・メ モ書きあり	

タイトル	記載日	未記入日	言語	備考	相馬年表
(手帳)	1897 年 4 月 19 日 ~9 月 25 日		和文	メモ書きあり	4 月横浜正金銀行頭取
(手帳)	1897 年 9 月 26 日 ~1898 年 3 月 31 日		和文	住所録・メモ書きあり	
(手帳)	1898 年 4 月 1 日 ~10 月 31 日	8 月 9~16 日	和文	メモ書きあり	
(手帳)	1898 年 11 月 1 日 ~1899 年 7 月 31 日		和文	住所録・メモ書きあり	
(手帳)	1898 年 8 月 1 日 ~12 月 31 日	12 月 21 日	和文	メモ書きあり	
(手帳)	1900 年 1 月 1 日 ~9 月 3 日	5 月 26 日、6 月 26・27 日、8 月 27 日	和文 英文	メモ書きあり	4 月欧米へ出張、6 月従五位
(手帳)	1900 年 9 月 3 日 ~1901 年 12 月 31 日		和文	住所録・「上海要事」ほかメモ書きあり	
(手帳)	1902 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	1 月 23 日	和文	「北京支店ニ関スル件」ほかメモ書きあり	3 月清国へ出張、12 月勲五等瑞宝章
(手帳)	1903 年 1 月 1 日 ~11 月 7 日	2 月 25~28 日	和文	メモ書きあり	
(手帳)	1903 年 11 月 8 日 ~1904 年 6 月 30 日	2 月 5~8 日	和文	住所録・メモ書きあり	
(手帳)	1904 年 7 月 1 日 ~1905 年 6 月 30 日		和文	住所録・メモ書きあり	
(手帳)	1905 年 7 月 1 日 ~1906 年 3 月 31 日	11 月 24 日	和文	メモ書きあり	3 月横浜正金銀行頭取退任（引続き取締役）、4 月勲三等旭日中綬章
(手帳)	1906 年 4 月 1 日 ~11 月 30 日	4 月 5・6 日、9 月 21・23 日、11 月 15 日	和文	住所録・メモ書きあり	
(手帳)	1906 年 12 月 1 日 ~12 月 31 日		和文	メモ書きあり	
(手帳)	1906 年 8 月 27 日 ~9 月 5 日		和文	箱根旅行記	
銃猟日記 SPORTING DIARY.	1906 年 10 月 15・17・19・30・31 日、11 月 1~8・10・29・30 日、12 月 1・5 日、1907 年 1 月 7・8・10・11・13・14・23・28・29、2 月 2・20・23 日、3 月 1・7・8・27・28・30 日、4 月 2 日		和文		

タイトル	記載日	未記入日	言語	備考	相馬年表
(手帳)	1907 年 1 月 1 日 ~11 月 30 日	1 月 3~5 日、4 月 24・25 日、6 月 11 日、9 月 20 日	和文	住所録あり	9 月勲三等旭日中 綬章
銃猟日記 SPORTING DIARY.	1907 年 10 月 15・ 19・26・30・31 日		和文		
(手帳)	1907 年 12 月 1 日 ~1908 年 12 月 31 日	1907 年 12 月 14~16 日、1908 年 1 月 10 日、2 月 3~19・21~28 日、3 月 28 日、6 月 3・5~7 日、 7 月 17 日、9 月 18・19 日、11 月 15 日	和文	住所録あり	
(手帳)	1909 年 1 月 1 日 ~12 月 28 日	2 月 14~19 日、3 月 30 日、4 月 5・ 6・13~17・27~30 日、5 月 1~6 日、 6 月 11・20~25 日、10 月 12・21・ 22 日	和文	住所録・メ モ書きあり	
明治四十三年 懷中日記	1910 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	3 月 5~9・11・14・15 日、4 月 28 日、 5 月 11・28~31 日、6 月 25~29 日、 9 月 15・16・30 日、10 月 13~16・ 24・25・28 日、11 月 14~30 日、 12 月 2・3 日	和文		
明治四十四年 懷中日記	1911 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	2 月 22~25 日、3 月 3~5・15・17 日、4 月 10・12 日、6 月 6・7・14・ 23・29・30 日、7 月 1~31 日、9 月 25・26・30 日、10 月 1~17 日、11 月 14・15 日、12 月 6・7・12・13・19 日	和文	メモ書きあ り	
明治四十五年 懷中日記	1912 年 1 月 1 日 ~4 月 4 日	2 月 2・16・26・28、3 月 10~12 日	和文	日記補遺・ 住所録あり	
大正三年 懷中日記	1914 年 1 月 1 日 ~3 月 27 日	1 月 20 日	和文	住所録あり	(大正 2 年 8 月か ら日本興業銀行 監査役)
(手帳)	1915 年 1 月 1 日 ~8 月 12 日	2 月 17 日、4 月 7・26~28 日、5 月 4・5・10~12・22~25・27・28 日、 6 月 8~30 日、7 月 1~19・29~31 日、 8 月 1~6 日	和文	専修大学卒 業式に於け る演説案・ メモ書きあ り	
(手帳)	1916 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	1 月 18 日、4 月 29 日、6 月 26・ 27 日	和文	住所録あり	12 月北米大学会 長
(手帳)	1917 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日	3 月 29~31 日、4 月 3~8・24・25・ 28 日、6 月 4~6 日、8 月 12 日、 10 月 15~17 日	和文	メモ書きあ り	
(手帳)	1918 年 1 月 1 日 ~4 月 17 日	2 月 14 日	和文 英文		2 月維新史料編 纂会委員
(手帳)	1919 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日		和文		
(手帳)	1920 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日		和文	会計簿・メ モ書きあり	
(手帳)	1921 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日		和文	住所録・メ モ書きあり	

タイトル	記載日	未記入日	言語	備考	相馬年表
(手帳)	1922 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日		和文	住所録・専修学校横浜支部講演会の祝詞メモほかあり	8 月専修大学初代学長、10 月教育功労者として表彰
(手帳)	1922 年 1 月 1 日 ~12 月 25 日	1 月 1 日 ~3 月 15・18・22~23・27~31 日、4 月 3・4・10・12~17・21・24・26~27・29 日、5 月 1・2・4・7~20・23・25・31 日、6 月 2・3・5~9・11~17・19~25・27~30 日、7 月 1・3~5・9・10・14・18・19・22~26・29~31 日、8 月 1 日 ~9 月 13・17~22・25~27・29・30 日、10 月 1・4・7・9・12・13・16・17・19・21・23・25 日、11 月 1・6・8・10・13~17・20・22・24・25・27~30 日、12 月 1・2・4~16・20・21・23・24 日	和文	「大正十一年四月九日園遊招待人数」あり	
Pocket Diary 1923	1923 年 1 月 1 日 ~12 月 31 日		和文	住所録・日記補遺・メモ書きあり	
(手帳)	1924 年 1 月 1 日 ~1 月 17 日		和文		1 月死去、正五位及び勲二等